

喜怒哀楽 愁想

岡山市に喜怒哀楽という有名なお寿司屋さんがあり、大将とは30年来のお付き合いをさせて頂いています。来たる12月1日にお招きを受けて飛び跳ねてお伺いする準備を進めながら、樹々の上から語るような月光を受けて喜怒哀楽を想って見ました。

(1)羽田空港

福岡空港から満員の飛行機で羽田空港に到着。慌てる必要がないのが今の私。気持ちもゆったりとして歩いていた。エスカレーターを降りる寸前、ある一家の動きが私の心を揺すぶった。

初老のおばあちゃんが3歳位の孫の手をひいている。片方の手には自分の身の回りを入れたような小さなキャリーバッグをひいている。その一歩前を暖かい布でおおわれた赤ちゃんがお母さんに抱っこされている。急に寒くなった日であったが、その布のくるみ具合から母の愛がにじみ出ている。ほぼ並行少し、その前を大きな荷物を引いてお父さんが、おばあちゃんの足取りに合わせてゆっくりと歩いている。ただそれだけ。よくある光景ですが、私はその家族の後ろ姿を見て、いつにない喜びが湧いてきました。少し前かがみになって歩くおばあちゃん、喜怒哀楽をかみしめて歩いてきたその背なかから孫の手をひく豊かな恵みが、その穏やかな足取りから感じとれた。この一家が醸し出している精神的な雰囲気は、彼らの意図に関係なく周りに、ほのぼのとした影響を与えている。私はその穏やさ、暖かさを感じさせていただいて、今日ここに居合わせてくださるようになってくださった神に感謝しました。何気ない人生の一瞬のひとこま、幸せな家族が、周りを和やかにする穏やかな秋のひとつとき。

(2)品川駅

山手線が始発から止まっている土曜日、心なしかいつもより人通りは少ない。新幹線の時間まで30程ある。「品川駅、お世話になったなあ」ふとある思いが浮かんできた。移動の多い人生を送っている自分を省みて、一番乗降した駅は、品川駅だと気がついた。20歳から今日まで数えられないほど歩いている駅である。若い頃は専ら京浜東北線の音を聞きながら「ホームの立ち食い蕎麦で夕食をすませた」「きつね蕎麦とおにぎり一箇」十分に満足した学生時代、立ち食いの顔なじみも出来、会話もあった。新幹線の走るずっと前の頃である。ホームに漂う蕎麦屋の懐かしい臭いと味、今はどうなっているのか。高級化した

駅ナカに蕎麦屋さんはあるか、探して歩いてみた。「あった」。この安堵感はどう表現していいだろう。

もちろん何代もの変遷を経ているであろうから、あのころの面影を求めることは、こっけいなことだが「あった」というだけで嬉しかった。さっそく、きつね蕎麦の食券を買って並んだ。立ち食いのスペースも狭かった。ホームでのスペースは恥ずかしいくらい広がった。懐かしい素朴な味とは違った複雑な味に「変化とはこんなものか」と独り言を言いながら昼食をすませて、こだま号に乗った。うら寂しい60年前が愛おしかった。

(3)同窓会

12日は高等学校の同窓会（東京第12期会）が霞ヶ関のビルであった。学校は大阪であり学年は400名、卒業してもうすぐ60年になる。全国から23名が集まった。50年以上続いている同窓会だが、私は3回目の出席である。後ろを向かないでひたすら前進したといえ、格好はいいのだが、劣等感にさいなまれた高校時代に記憶を戻すことが怖かったにすぎない。今回も勇気を振り絞って参加した。驚いたこと、嬉しいことが沢山与えられた。

私のクラスには女性が2人しかいなかったが、社長夫人になられた一人の女性が、私をみて名前を呼んでくださった「あなたは卒業式には出ていなかったの。大学の入学試験のため欠席すると担任の先生から説明があった」「私の席が一番前になったとき、後ろにあなたがいて、よく話をしたから、その後どうなったか、ずっと気がかりで同窓会の度に探したがあなたはこなかった。今日、恐らく最後になるだろうこの日に逢えて良かった」とスピーチしてくださった。私は卒業式に出なかったことを初めて知った。

もう一人の男性も「沢山の本を紹介してくれた。内村鑑三、天野貞祐、北一輝等、親切にしてくれた」と。

四当五落の時代、そんな余裕はなく、ひたすら言われるままに机に向かった苦しい思い出しかなかった自分がそんなことを言っていたのかと驚いた。覚えてくれていた友に感謝の念で涙がでた。人はどんなに小さくても何らかの影響を持っているのだと気づかせてくれたのである。幸せは人を通してやってくると言われることを実感させてくれた友人達に感謝して別れた。

(4)福岡市美術館



福岡に行きだして30年が過ぎた。移動の多い私には故郷の思い出がないが、福岡は第二の故郷である。喜怒哀楽の全てを包み込んでくれた大地と言っても言い過ぎにはならない。今も生活を支えてくれている地である。毎月一週間、私の意識は福岡にある。

初めて福岡市美術館に足を運ん

だ。ギュスターヴ・モローの特別展がゆっくり見れる。ずっと以前から「見たくない絵」の一番であったはず、なぜか足が向いた。美術館に入ってすぐに展示場に行く勇気はなく、夕焼けの美しい景色の見える喫茶室に入ってコーヒーを飲んで決心を固めてた。先ず作者の生い立ちの説明があり、「尊敬する母」と「やさしい同伴者なる女性」の絵から始まった。絵を見る前に生い立ちの知識を持ってしまったので、この二人の女性の絵を鑑賞するには理性が先行してしまった。その後は音声ガイドに従って進んでいったが、

「何故、あの尊敬する母とやさしい同伴者なる女性に接しながら、このような女性像を描けたのか」と疑問がのこった。私には全く理解できない女性像ファミ・ファタル、知らなくて良かったとも思った。一つ最後の方に

「人類の生」という祭壇画風の絵があった。彼が言いたかったのはこのことに集約されるのか、あるいは長じてこの領域に達したのかは分からない。ここまで人間の罪をえぐり出さなければならないのか、芸術眼の浅はかな私には、それが無くて良かったと思う。

これを書いたのは「何故、あの展覧会を見に行ったのか」という友への返事をしなければと思ったからである。

絵画の説明

縦3段横3段の9窓構成になっている。縦の説明 最上段黄金に時代、2段目は銀の時代、3段目は鉄の時代横の説明 左から朝、昼、夜最上段左からアダム（黄金時代）朝に祈り、昼に陶醉、夜は眠り、人類の純粋な活動が示されている

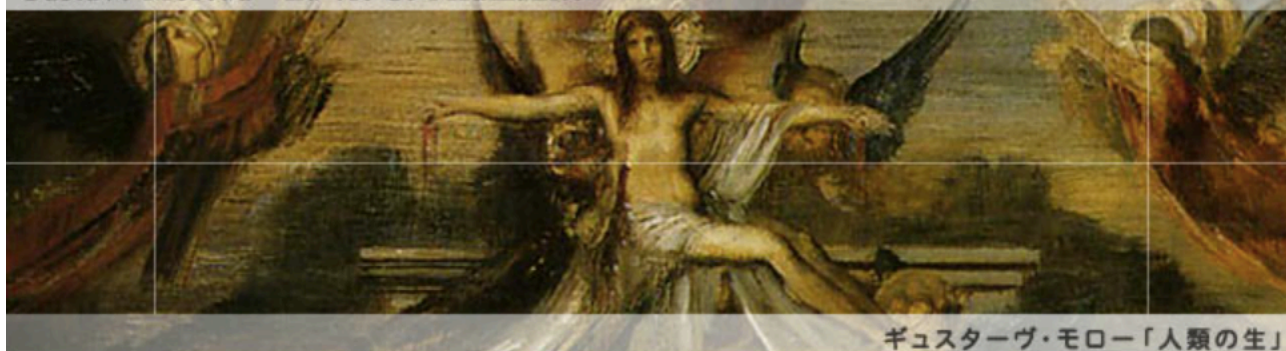
2段目はギリシャ神話「オルフェウス」の物語、左から朝は夢、昼は歌、夜は涙

3段目は旧約聖書創世記カインとアベルの物語 最上段のアーチの拡大は罪の赦しと神の愛が描かれている。



「人類の生」

Gustave Moreau -La vie de l'Humanité-



ギュスターヴ・モロー「人類の生」

斜め読みも出来ると言われている。多様な解釈が出来るの、可能にするのが芸術の特徴かも知れない。見る人の知識と感性の総合力が試される絵のようである。

(5)怒っても仕方のないこと。でも、やはり、怒り

自民党の三原じゅん子参院議員が自らのツイッターに「政権を握っているのは総理大臣だけ」と書き込み、ネット空間で波紋を広げているようです。こうした点を踏まえ、今回の三原氏のツイッター投稿を有識者はどう見るのか。野中尚人・学習院大学教授（比較政治）に聞いた。（デジタル朝日11月6日号より）

野中教授は「日本の場合、伝統的に自民党側が首相官邸を押さえていろいろなことを決めてきた。『政権』という言葉は、与党とパッケージで使われてきた」と指摘する。与党と一体となって政策や政治の方針を確認する場としては、「政府与党連絡会議」というのが「55年体制」下から現在まで形を変えながら存続している。

野中教授は、今回のような見解が与党である自民党議員から示されることについて、「安倍1強」の構造を背景にこう分析する。「実質的に権力を握っているのは首相だ、というのはあり得る発言だが、通常は野党議員が『独裁者』を批判するためにそういう表現を使う。与党議員がそう言うのは、今の自民党の現状をよく表している」
独裁政治は更に深みを増している。対策はないのか？

(6)独裁政治の危機を考えている人もいる

以下もデジタル朝日の記事から引用

①衆院の選挙制度を小選挙区から中選挙区に戻すべきだということですか。

「それをやれば政治が変わります。派閥が活発で金権問題があったと言われた中選挙区の時と今を比べたら、どっちがいいのか。今は政治家がものを言わない。小選挙区で落ちた人が比例区で復活してくる。閉塞（へいそく）感の中で、目先のことしか追いかけない。政治家の発言がまことに軽い。こんなことは中選挙区では絶対になかったことです。かつて我々は小選挙区に反対して守旧派と呼ばれたが、今度は改革派として『選挙制度を変えろ』と言う番が来たと思います」

②7月の参院選では競合する野党の調整をし、8月の埼玉県知事選では野党系候補の支援に回りました。野党に協力すれば政治は変わるのでしょうか。

「野党が弱いことも、自民党がこうなっている理由です。自民党内から健全性を取り戻す考え方は絶望的です。野党を強くして対抗勢力を育てるのも、保守政治家の仕事ではないかと思います」

こう語ったのは、かつて自民党で将来の首相候補と目され、汚職事件での逮捕、失職を経てメディアの取材に沈黙を貫いてきた中村喜四郎衆院議員（70）＝当選14回＝が朝日新聞のインタビューに応じた。無所属の立場で安倍政権に対抗できる「強い野党」づく

りに心血を注ぐ理由を語った。自他ともに認める保守政治家を突き動かしたのは、今の自民党に対する「絶望」だった。（10月3日）

小選挙区制を中選挙区制にするというのは、私の以前からの考えでした。先月号でも触れたばかりですが、独裁政治の到来の力の方が強いですから、国民は日本的独裁政治を学ばねばなりません。

パリ通信へどうぞ

今年のベストピア5月号で纏めて紹介しましたル・コルビュジェのアジール・フロタンを巡る日本とフランスの協力が結実しようとしています。そこには、日本の中小企業の優れた技術の結晶と親善好意が溢れています。最終場面に立ち向かっている人々を援助している古賀さんの記事はリアルです。



ル・コルビュジェの浮かぶ建築
難民避難船への再生に導いた女性たちとその物語

ミシェル・カントール・デュバル 著
古賀 彰子 訳
遠藤 秀平 監修
鹿島出版会

今は川底に沈んでいます。フランスの文化財です。これを浮上させて、日本の企業が制作し寄贈した栈橋をかけ文化事業の歴史を保存しようと企画して、日本とフランスの共同事業です。橋を架ける。絆を深める。日本人発想で親しみやすいプロジェクトです。